

# 本草綱目と日本の博物学

上 野 益 三

## 1

古代の日本人によって、わが国土の植物や動物がある程度識別され、名が与えられた。しかし、その知識の体系化は中国から伝来した本草に学んだ。本草は薬の知識体系であるが、後世になるとともに次第に博物学的内容を増加する。わが国にはじめて渡来した「本草集注」<sup>ホンゾウシツチユウ</sup>では、薬を上中下3品に分類したが、それについて平安朝初期に伝えられた「新修本草」では、3品分類に草木禽獣等の博物学的分類を加味している。しかし、本草があくまで薬の学問であったことには変りがない。

江戸時代初期にわが国に導入された、明の李時珍の「本草綱目」<sup>ホンゾウコウモク</sup>は、薬物の著述にはちがいが無いが、それまでの歴代本草と異なり、その基底を一貫して流れているのは、著者時珍の博物学的思考\*である。この本の薬学的部分を取り除けば、Bretschneider<sup>1)</sup>\*\*が指摘したように、正に博物学である。しかも、時珍は薬になる動植物を通じて、生物界全体の展望をもった、すぐれた博物学者であった。西欧の近代自然科学の進歩とは無縁の遠東の地で、時珍は余人の到達できなかった高度の水準に達した科学者であったとの讃辞さえある<sup>2)</sup>。日本に渡った「本草綱目」が、本来の使命なる薬学だけでなく、本草研究者のなかから博物学者を育てるために、大きい役割を果たした。これは西欧には全く見られなかった現象である。それゆえ、わが博物学の発達

---

\*ここで博物学というのは、英語の natural history に相当し、生物科学のうちで、生物個体を対象とする部分である。従って、分子生物学等のいわゆる現代生物学の一部は博物学ではない。

\*\*本篇末の註参照。以下同様。

に対する「綱目」の貢献は、高く評価せられるべきである。しかし、「綱目」は一方あまりに深くわが博物学者のなかに浸透したため、それによって生じた弊害の大きさも、決して被うことができないのである。

「本草綱目」52巻付図2巻がはじめて長崎に舶来したのは慶長12年(1607)で、その初版(金陵本)刊行(明の万暦24年)後、11年目である。最初の和刻本ができたのが寛永14年(1637)で、このような大部の書籍が復刻されたのであるから、世の要望に合致したのにちがいない。そののちも、数種の和刻本ができて普及した<sup>3)</sup>。「綱目」では、所載の薬用動植物(鉱物を含む)を、16部60類に分類する。それぞれの葉の条下に、「集解」という項があり、それが葉になる動植物等の形状産地等を記述する部分である。この項がわが本草研究者たちの博物学的好学心を誘発した。これは、葉舗にある生葉の母体である植物や動物を明かにし、真贋の鑑別法、国産の有無等をもっとよく知りたいという、実用上の必要からはじまった。それがやがて広く天産物に目を開き、興味をもつようになったのは、自然のなりゆきであろう。「本草綱目」の薬学的事項以外の受け入れかたが、「綱目」がもつ本来の使命とは、ちがった性格の学問を育てることになった。それが博物学である。博物学では、本草学の如く、必ずしも葉のような人生に有用のものにかかわりなく、動植物そのものについてよく知りたいという、知識慾の上に立って研修せられた。

「本草綱目」の最初の和刻本(1637)刊行からのち約200年間、多少の抵抗もあったが、この本はわが本草学者や博物学者の動植物の見かたを大きく支配し、遂に抜くことができない力をもつまでになった。もっとも進歩的な博物学者であった平賀源内(鳩溪)でさえ、その劃期的な著書「ぶつるいひんしつ物類品隲」(宝暦13年, 1763, 刊行)6巻の構成を「本草綱目」の分類に従った。源内より少しのちの指導的博物学者小野職博もよひろ(蘭山)は、「綱目」の分類体系を批判することなく、「本草綱目啓蒙」48巻(享和3年, 1803, 初版)を著した。また、岩崎常正(灌園)はその大著「本草図譜」96巻(文政11年, 1828, 成稿)の構成を、ためらうことなく「綱目」のシステムに準拠した。常正のこ

の図譜の書名の“本草”は植物の同義語として使われている。これらの著書は、書名を何といたっていようとも、その内容は本草学（葉の学問としての正統本草学）ではなく、もはや純然たる博物学である<sup>4)</sup>。

日本の博物学は、上述のように、「本草綱目」を大きい抛りどころとして発達した。しかし、19世紀のはじめには「綱目」に支配された考えかたを清算すべき時が来ていた。そして、近代科学的方法によって脱皮した、西洋博物学を導入して、わが博物学の近代化を図るべきであった。この動きは蘭学派博物学者たちのなかに起りつつあった。そして、それを実行に移し得る博物学者の一人は、「植学啓原」や「舎密開宗」の著者宇田川榕菴であったが、健康でなかった榕菴に、天はそれをなし遂げるだけの歳月を与えなかった<sup>5)</sup>。

## 2

「本草綱目」がわが博物学者たちに対して、なにゆえ、前節に述べたような、強大な支配力をもつようになったか。これには、いくつかの理由がかぞえられよう。その検討は、博物学近代化の経過を明かにするための重要な研究課題である。

### 1. 中国本草の影響の累積

わが国における本草的思考法は、「本草綱目」の導入によるだけではない。遠く平安朝より前に、陶弘景の「神農本草経集注」<sup>6)</sup>（本草集注、西暦 ca. 500 成）が渡来したのにはじまる。そして歴代中国の諸本草が次々と輸入され、長年にわたって日本人の本草思想を培った。「集注」以後の諸本草は、増補改訂が加えられて、雪だるま式に大部のものになったが、その一貫した根本思想は「集注」を踏襲したものである。そして、宋時代の「證類本草」<sup>7)</sup>に到って大成の域に達した。「新修本草」<sup>8)</sup>以後、鎌倉室町時代を通じ、「本草綱目」が渡来した江戸時代のはじめまで、わが本草学の主な典拠は「證類本草」であった。「綱目」が革新的な内容をもっていると観迎されはしたが、その「綱目」も「證類」を中軸としてでき上ったものである。このようにわ

が本草思想は一朝一夕にでき上ったのではないから、その土台の上に乗った「綱目」は、比較的容易に受容され、一旦定着すると容易に棄て去れない力を発揮した。「本草に曰う云々」とあれば、「綱目」といわれなくても、それが「綱目」を指すほど、「本草綱目」はわが国で権威をもった。

## 2. 「本草綱目」への傾倒

「本草綱目」がわが本草学者（医者も含め）の眼前に出現したとき、その構成と内容の清新さとが、革新的に見え、遂にこの本に心酔するという結果を招いたことは否定できない。「綱目」が薬物の本としては邪道をゆくもののだとの批判があるが、博物学の立場から見れば、それまでの諸本草とくらべて、著しく博物学的内容に富むことは事実である。しかし、前述のようにその本質は「證類本草」を全く脱却したものでない。それは、歴代の中国本草の分類体系を比較することによってもわかる。

齊, 陶弘景 「本草集注」 上, 中, 下品  
 唐, 蘇敬ら 「新修本草」 玉石, 草, 木, 獸禽, 蟲魚, 果, 菜, 米  
 宋, 唐慎微 「証類本草」 玉石, 草, 木, 人, 獸, 禽, 蟲魚, 果, 穀, 菜  
 明, 李時珍 「本草綱目」 水, 火, 土, 金石, 草, 穀, 菜, 果, 木, 服器, 蟲, 鱗, 介, 禽, 獸, 人。

李時珍が「新修」以来の果菜穀を草の次に移し、草穀菜果木の順序に改めたのは、“微ヨリ巨ニ至ル”（卷之首、凡例、もと漢文）のであるという。また、蟲鱗介禽獸の順にならべ、人で終るのは、“賤ヨリ貴ニ至ル”（同上、凡例）のであるとする。鱗は主として魚類である。小さいものから大きいものに及ぶというのも、また、賤(下等)から貴(高等)に至るというのも、時珍が素朴ながら、生物界に対する正しい展望をもっていたことを示している。わが博物学者たちは、「綱目」の動植物各個の記述には大いに興味を喚起されたが、時珍が考えたような根本的な点には、考えを及ぼさなかった。つまり、記載的に終始して理論的ではなかった。この意味で、小野蘭山の「本草綱目啓蒙」より100年近くも前に出た、貝原篤信（益軒）の「大和本草」のほうが「啓蒙」よりも、もっと理論的であり哲学がある。篤信は「大和本草」巻一の冒頭“本艸ノ書ヲ論ス”という章で、“本草綱目ニ品類ヲ

分ツニ疑フ可キ事多シ” といい、多くの例をあげて「綱目」を批判している。そして自著「大和本草」では「綱目」の体系を改変した独自の分類を使って、動植物を記載した。19世紀のはじめに、伊藤圭介著「泰西本草名疏」（文政12年、1829、刊）が出たときも、「本草綱目」で育ったわが博物学者たちの頭脳は、容易にそれを受けつけなかった。「名疏」2巻は、Carl Peter Thunberg の「日本植物誌」（Flora Japonica. Lipsiae, 1784）から学名を抄出し、それに和名を考定したもので、はじめて外国人による日本植物の知識が翻訳導入されたのである。「名疏」の付録1～2巻には、スウェーデンの Carl Linnaeus (Carl von Linné)<sup>\*</sup> の劃期的な植物24綱分類式や二名法による学名の意味が紹介された<sup>9)</sup>。Thunberg<sup>10)</sup> も日本植物を Linné の方法で処理しているから、この意味で近代科学が導入されたことになる。

### 3. 「本草綱目」への抵抗

「綱目」に不信を抱く一部の学者は、復古調で古本草にかえろうとした。幕府医官望月三英（鹿門）が安永4年（1775）に、朝鮮刊本によって「證類本草」（經史證類大観本草）を校刻した如く、また、岩崎常正の門人岡村尚謙が「本草古義」を著した如きが、その例であろう。少し意味はちがうが、19世紀前半に、「新修本草」や「神農本草經集注」の復原作業が行われたのも、またその例であろう。しかし、貝原篤信以後、「綱目」に徹底的な批判を加えるものは出ず、「綱目」流の自然物の見かたは、依然として勢力を保って明治のはじめまでつづいた。

### 4. 方法論の欠如と受容の速度

「本草綱目」からの脱却を容易にしなかった大きい原因の一に、わが博物学者たち（博物学者とは限らないが）に、近代科学的な方法論の欠如がかぞえられる。ルネッサンス以後のヨーロッパ近代科学の方法を導入するためには、鎖国日本の門戸はあまりに窄まかった。長崎からわずかに入ってくるオランダ語の科学書に頼って、西洋科学を知るほかはない。オランダ語に訳さ

\* 以下 Linné を用いる。ただし、Carl von Linné は1761以後。

れた他の諸国の科学書は数がしれている。従って、オランダ語に訳されていない他国の科学を知る機会は、極めて少なかったといわねばなるまい。

さらに、導入速度の極めておそいことである。その上、導入後理解が進むまでに長年月を要したことである。これが、ヨーロッパとの懸隔を大きくし、いつまで経っても近代科学の受容にまで進むことができなかったのである。

次に、古代の中国本草をも含めて、若干の主要著述の導入ならびに理解の速度を一括表示する。

表 1

書名	原稿または 成稿または 刊行年 (a)	輸入 年 (b)	aとbと の期間 (年)	和訳成稿ま たは和刻本 刊行年 (c)	aからcま での期間 (年)
新修本草(唐)	659(成)	c. 730	c. 70	c. 918(成) <sup>1)</sup>	c. 259
本草綱目(明)	(1590(成) 1596(刊))	1607	(17 11)	1637 (刊)	( 47 30)
救荒本草(明)	1639(刊)	1712(?)	83	1716 (刊)	77
秘伝花鏡(清)	1688(刊)	1719	31	1773 (刊)	85
ドネウス草木誌 (オランダ)	1644(刊)	1659	14	1742-1750 <sup>2)</sup> {c. 1771 <sup>3)</sup> c. 1823 <sup>4)</sup> c. 1751 <sup>5)</sup>	98-106 127 c. 179
ヨンストン動物図説 (オランダ)	1660(刊)	1663	3		81
ツェンベリー日本植物誌 (ドイツ)	1784(刊)	1825	41	1829 <sup>6)</sup> (刊)	45

(注) 1) 「本草和名」の成稿；2) 野呂元丈抄訳；3) 平賀源内部分訳；4) 石井庄助ら全訳；5) 野呂元丈抄訳；6) 伊藤圭介抄（「泰西本草名疏」）。

初期渡来の「新修本草」の内容の理解が、<sup>ほんせうわみやう</sup>深江輔仁の「本草和名」にまとめられるまで、2世紀半の歳月を経過している。もっとも「新修本草」は延暦6年(787)に、従来用いられた「本草集注」に代えて、医師の必読書と定められたから<sup>11)</sup>、「和名」ができるまで130年余の間も人々が読んではいたのであろう。しかし、具体的な著述としては、輔仁の「本草和名」以前には何もない。

「本草綱目」の輸入は、「本草和名」の成立より700年ものちである。平

安朝の昔とは、中国との交通事情もちがうし、「新修本草」時代のように、筆写本ではなく刊本であるから、その導入ははるかに速かな筈である。さらに、「綱目」52巻の刊行完結を万暦24年(1596)とすると、表1のa~b期間は11年に短縮する。そして、最初の和刻本が刊行されるまで30年である。このように、当時としては、比較的速かに渡来し、また割合短年月で日本版ができて普及したことが、「綱目」をしてわが本草界、ひいては博物学界を支配させた、有力な要因の一であろうと思われる。

「救荒本草」<sup>きゆうかうほんぞう</sup>は松岡恕庵が「農政全書」(明の崇禎12年、1639刊)に収められていた荒政巻46~60を採り上げて和刻した。「救荒本草」そのものは「本草綱目」よりも前にできていた。「救荒本草」は饑饉時に採って食うべき野生植物の図説であり、簡にして要を得、図も「綱目」よりすぐれているので、植物を知るための好参考書であった。それゆえ、本草学から離れて成長しようとする段階にあった、わが博物学に「救荒本草」が果たした役割は、過少評価はできない。しかし、内容の豊富さの点では、「救荒」は「綱目」に数歩を譲るから、研究者が「綱目」により多くひきつけられたのは、やむを得なかった。「救荒本草」は救荒の指導書ではあるが、「綱目」と比較すればはるかに博物学的である。本草学の本筋から離れつつあった博物学者松岡恕庵が、この本を和刻したのは当然であった。恕庵の門から出た小野蘭山(前出)が、師恕庵が和刻した「救荒本草」を校訂して、もう一度刊行したのが寛政11年(1799)である。松岡の最初の校刻本(享保元年、1716)から83年を経過している。博物学の発達にともない、「綱目」の対抗として、この本は世の要望に応じたが「綱目」には及ばなかった。しかし、岩崎常正が「救荒本草通解」(未刊)を著し、蘭山の孫小野職孝<sup>もとたか</sup>(恵叡)が「救荒本草啓蒙」を刊行したのも、この傾向を反映したものである。

「花鏡」(秘伝花鏡)の和刻は、平賀源内が清の康熙27年(1688)版を底本として校刻した。わが元禄元年である。この日本版(重刻秘伝花鏡)が出るまでに、原版より85年が経過している。「花鏡」は草木禽獸虫魚の培養法を述べたものであるが、これも「綱目」の対抗として大きい役割を果たした。

西洋博物学では「ヨNSTON動物図説」I. Jonstons Naeukeurige Beschryving van de Natuur der Viervoetige Dieren, Vissen en Bloedloze Water-Dieren, Vogelen, Kronkel-Dieren, Slangen en Draken. Amsterdam, 1660)<sup>12)</sup> が、刊行後わずか3年で舶来したにもかかわらず、80余年を経てようやくその抄訳ができた。オランダ商館長が貢物として將軍家綱に献じ、そののち空しく幕府の紅葉山文庫に眠っていた。將軍吉宗の実学奨励と蘭学興隆の波に乗って、寛保元年(1741)3月野呂元丈のろひんせいようが江戸参府のオランダ商館長一行に質疑するために持ち出し、その抄訳の結果として「阿蘭陀尙書魚虫和解わが(1巻, 1741)ができた。次に「ドドネウス草木誌」(Rembert Dodoens [Rembertus Dodoneus], Cruydtboek, Antwerp, 1644)<sup>13)14)</sup>は、薬用並に有用植物図説で、刊行後速かに渡来していたのであるが、これまた、その理解までに長い年月がかかった。本書の抄訳をはじめてつくったのは、上記の野呂元丈で、寛保2年壬戌(1742)から寛延3年庚午(1750)までの間に8回、毎年江戸参府のオランダ商館長一行にこの書の内容を質疑した。そして、「壬戌阿蘭陀本草和解」から「庚午阿蘭陀本草和解」まで全部で8冊に、合計106種の「ドドネウス」所載植物の和解(抄訳)を載せた<sup>15)</sup>。その次に、平賀源内が明和5~8年に、長崎で通詞吉雄幸左衛門の助力を得て、「ドドネウス」の部分訳をつくっている<sup>16)</sup>。これが原本刊行後127年目である。「ドドネウス草木誌」の本格的翻譯は、松平定信が企画し、元長崎通詞石井庄助がその原訳をつくった<sup>17)</sup>。170数冊に上る大部の原稿は、すでにできた版下の一部、版木とともに文政12年(1829)3月の江戸の大火で鳥有に帰した。今わずかに残存しているのは、その極く一部分に過ぎない<sup>18)</sup>。この訳本の完成は原本刊行後約180年、その努力は多とすべきであるが、世界的な大勢から見て、古典の翻譯に力を傾けただけに終わったというほかはない。そして、わが博物学の発達には、ほとんど寄与することがなかった。上記1829年は「泰西本草名疏」(前出)の出た年である。

##### 5. 権威に対する盲従

中世のヨーロッパで、なお古代ギリシアの Aristoteles が信奉されたよう

に、わが国でも、永年蓄積された中国本草知識の土台の上とはいいながら、新らしく君臨した「本草綱目」が、権威として尊重され盲従された。日本の博物学者は、Linnéによる生物界の革新的な分類が、生物の研究方法を変革しつつあることを知らなかった。それを紹介した、「泰西本草名疏」が出た1829年は、Linnéの“Systema naturae”の初版(1735)から94年ののちであり、同書の定本となった第10版(1758~59)からも70年余が経っている<sup>19)</sup>。その間に西洋の博物学がいかに大きく転換しようとしていたかを、わが博物学者たちは気づかなかった。ヨーロッパの博物学では、植物の研究が薬用の目的や、海外異国から持ち帰られる、珍奇な植物に対する興味からだけでなく、植物そのものの知識を得るために進んだ。動物も植物と同じく、それらの知識を得るだけの目的で取り上げられた。そして、それらはLinnéの方法によって処理され、もはや、いわゆる西洋本草(herbal)の時代<sup>20)</sup>を完全に脱却しつつあった。日本の学者が西洋本草にうち向ったといっても、Linnéより1世紀近くも昔の「ヨNSTON」や「ドドネウス」等を知ったのにとどまる。そして、野呂元丈が純粹の動物図説である「ヨNSTON」を1回限りで打ち切って、薬用植物図説「ドドネウス」に移ったように、人生のために有用のものほかは顧みない。その「ドドネウス」も、まだ東洋の本草の域を出ないものである。挿図の木版こそ「本草綱目」とは比較にならぬ精巧なものであるが、本全体の構想は「本草綱目」と大差がない。Linné以前の同じ時代には、洋の東西を問わず、互に何らの影響も受けないにもかかわらず、同型の思考に支配されていたといえよう。

以上述べてきたように、Linnéを境として、ヨーロッパの博物学が急速に近代化の道を進んだのに対し、日本では独特の博物学が進みはしたけれども、その根本的な考えかたの大勢は、「本草綱目」の周辺に低回した。これは近代科学の方法論を理解する機会が極めて乏しかったのと、同時に権威盲従の思想によって、一旦しみついた「本草綱目」をなかなか離脱し切れなかったのによるだろう。わずかに、長崎のP. Fr. von Sieboldの許に集ったその門人たちが、科学それ自体とともに、科学をいかに研究すべきかという方法を

学んだ。そのような状況下で、敢然と「本草綱目」の羈絆を脱し、Linné の分類式で植物図説を著した博物学者が現れた。美濃国大垣の飯沼長順(愨齋)である。名著「草木図説」の草部 20 巻のはじめの 5 巻が、安政 3 年 (1856) にまず刊行された。その全 20 巻は 20 世紀なっても、なおその価値をもちつづけた。愨齋が世を去ったのは明治のはじまる 3 年前慶応元年 (1865) であつた。

### 摘 要

明の李時珍の「本草綱目」を薬学の立場から論じたものは多い。しかし、この本は博物学の立場からも論ずべき多くのものを持っている。この小文では、「本草綱目」が日本の博物学の発達に果たした大きい貢献と、反面、わが博物学の近代化にとって、抜き難い抑制力を発揮して障害となった事情とを述べ、その理由を考察した。

### 〔註〕

- 1) Bretschneider, E., 1882. *Botanicon Sinicum. Notes on chinese botany from native and Western sources.* Vol. 1, 228 pp. London. [p. 62].
- 2) Needham, J., 1954, *Science and Civilisation in China.* Vol. 1, 318 pp. Cambridge, Univ. Press. [p. 147].
- 3) 渡辺幸三, 1949. 本草綱目とその版本, 薬用植物と生薬, vol. 3, p. 101—107; 同, 1953. 李時珍の本草綱目とその版本, 東洋史研究, vol. 12, p. 333—357.
- 4) 上野益三 (日本学士院編). 1960, 明治前日本生物学史. 第 1 巻, 691 pp. 東京, 日本学術振興会.
- 5) 弘化 3 年丙午 (1846) 6 月 22 日病没, 年 49.
- 6) 渡辺幸三. 1951. 陶弘景の本草に対する文献学的考察, 東方学報, 京都, 第 20 冊, p. 195—222. (京都大学人文科学研究所).
- 7) 「経史証類備急本草」系統の諸本. 平安朝後期以降に渡来していた. 簡略にして「証類本草」. 特に重要なのは, 「経史証類大観本草」. 渡辺幸三, 1652. 唐慎微の経史証類備急本草の系統とその版本, 東方学報, 京都, 第 21 冊, p. 160—206; 同氏, 1965. 読証類本草須知, 池坊学園短大紀要, No. 1, A, p. 1—9; 木村康一, 吉崎正雄, 1970. 経史証類大観本草 (影印). 東京, 広川書店.
- 8) 関西為人, 1964. 重輯新修本草. 664 pp. (中国文), 台北, 国立中国医薬研究所刊.
- 9) Linné が実際に植物を二名法で処理したのは, “*Species plantarum*”, (2 vols.), Holmiae, 1753. である. 伊藤圭介がこの本を見たことは恐らくなかっただろう. 「泰西本草名疏附録」下に載せる, リンネ二十四綱図 (色刷木版) の解には, “此

- 原図ハ紀元一千七百九十九年ノ鍍版ニシテ二十四綱ヲ揭示スルモノナリ”とある。これは恐らく、ケンブリッジ大学勅任教授 Thomas Martyn が、Linné の植物生殖器官（花）による分類式を、一般用に説き示した小冊，“Thirty-eight Plates with Explanations intended to illustrate Linnaeus's System of Vegetables”，London, 1799. を指すのであろう。圭介は文政10年（1827）9月長崎に下って Siebold に就学しているから、Siebold の許にこの本が来ていて、それを見たのではなかろうかと想像せられる。
- 10) Thunberg は Linné の門人であるが、長くスウェーデンを離れて他国にあり、その間に日本にも来た。1779年（安永8）故国に帰ったときは、師 Linné の没後15ヶ月目であった。そのうち Linné のあとを襲って、ウプサラ大学の植物学の教授の地位にあること44年間であった。Thunberg の“Flora Japonica”は Linné 方式によって日本植物を記載した最初の著述であるが、それがわが国に入るまで41年を経過している（表1）。それは近藤守重（好書故事、巻第八十書籍三十、蘭書三）が、“東方草木志一冊、原名フロラヤポニカ”と記録した本で、圭介が「名疏」の撰述に使った本とは別である。圭介は長崎で Siebold から「日本植物誌」を与えられた。
  - 11) 「続日本紀」巻第三十九（国史大系本）。
  - 12) 筆者が見た本は、大阪の愛日文庫本で、山片幡桃<sup>やまがたばんとう</sup>の旧蔵本である。古くは平賀源内の蔵書であったと伝えられる。この本の閲覧に便宜を図られた中尾堅一郎氏に深謝する。幡桃は本名長谷川有躬、通称升屋小右衛門、のち升屋久兵衛を継ぐ。大阪船場の商人で経済学者。蘭学にも興味があった。
  - 13) 東京国立博物館蔵本によった。蕃書調所の旧蔵本である。
  - 14) 最初の版はフランダース語で書かれ、“Crüydeboeck”と題し、1554年アントワープ版。オランダ語の最初の版は1563年である。（註20, Arber 参照）。近藤守重の「好書故事」（近藤正齋全集第三、1906, p. 249）に、ライデンの Fr. van Bavelingen 版（1618）を記録するが、筆者はその所在を知らないで、表1は、1644版（註13）によった。なお、ドドネウスの諸版については、Pritzel, G. A., 1872. Thesaurus literaturae botanicae..., p. 88 参照。
  - 15) 岡村千曳, 1959, ドドネウス CRVYDT-BOECK の邦訳について（1）、医学のあゆみ, vol. 28, 6, p. 428—435.
  - 16) 同上, 1959a. 同上, 28, 7, p. 489—493.
  - 17), 18) 同上, 1959b. 同上, 28, 8, p. 571—577.
  - 19) “Systema naturae”の初版は約10ページの大形本で、鉱物2, 植物3, 動物2種を載せる。実際に用いられるべきものは、第10版, 1～2巻（Holmiae, 1758—59）である。
  - 20) Arber, Agnes, 1953. Herbals; their Origin and Evolution. 2nd. ed., 326 pp. Cambridge, Univ. Press; 田中長三郎, 1931. 泰西本草及び本草家, 岩波講座生物学, 特殊問題, 49 pp.